

## 研究ノート

# ルーブリックを取り入れた学部留学生における初年次教育

京 祥太郎\*1

キーワード：留学生、初年次教育、ルーブリック、パフォーマンス評価

### 1 はじめに

私費外国人留学生（以下、留学生）が日本の大学学部や専修学校専門課程（以下、専門学校）などへの入学試験を受けるにあたっては、最近では留学生に対してもAO入試を行ったり推薦入試を行ったりと、多岐にわたる入学試験が実施されているが、未だ多くの学校で留学生の日本語力を測る目的で「日本語能力試験（以下、JLPT）や日本留学試験（以下、EJU）などの日本語の試験を受験していなければならない」という条件を設けている。JLPTであればN2以上を有していること、EJUであれば「日本語」200点以上（400満点）を有していることなどと、それぞれの学校で設定基準を設けている場合が多い。2010年に改訂されたJLPTでは、認定の目安を能力記述文 Can-do Statements（以下、Can-do）で提示されるようになり、N2レベルの認定の目安としては「日常的な場面で使われる日本語の理解に加え、より幅広い場面で使われる日本語をある程度理解することができる」と提示されている。また、EJUの「日本語シラバス」にも「日本の高等教育機関（特に大学学部）に、外国人留学生として入学を希望する者が、大学等での勉学・生活において必要となる言語活動に、日本語を用いて参加していくための能力をどの程度身に付けているか、測定することを目的とする」と述べられている。

しかし、日本の大学学部や専門学校での入学試験に合格し、無事、入学を許可された留学生の中には、財団法人日本語教育振興協会認定（日振協）の進学予備教育機関としての日本語教育機関（以下、日本語学校）などで1年から2年にかけて日本語を集中的に勉強し

ていたにもかかわらず、日本語能力が乏しいという留学生も見受けられ、そのような留学生は入学しても日本語での授業についていけず、結局はドロップアウトをしてしまうというケースも少なくないのが現状である。特に、最近の傾向として近年急増しているベトナムやネパールなど非漢字圏からの留学生にそのような傾向がみてとれる。

そこで、本稿では先ず昨今の留学生における現状と問題の所在を整理し、日本語力が十分でない留学生でも参加することができる「話す」活動を行う上で必要なパフォーマンスを評価するための基準となるルーブリックを作成し、ルーブリックを取り入れた学部留学生における初年次教育のあり方について検討していくこととする。

### 2 留学生の現状と問題の所在

日本国内の多くの日本語学校では、6月・11月に実施されるEJUや7月・12月に実施されるJLPTなどの試験対策に突起した授業形態をとっており、12月までは教師主導型での「読む」「聞く」など受容技能中心の授業を行い、12月のJLPT後の授業は体系的に行われてないのが現状であると言える。進学予備教育機関の目的としては、留学生別科に関して小堀（2002）は「彼等が日本の大学生活を可能にするためには、当然のことながら、日本語能力を身につけなければならない。その日本語学習の最終目標は①日本人学生とのコミュニケーションが容易にできること。②講義を聞いて要点がノートできること。③ゼミ等で発表をし、討論に参加できること。④レポート・卒業論文等が書け

\*1 至誠館大学 ライフデザイン学部

ること。⑤「学術書等が読めること」と提言している。留学生別科、日本語学校問わず進学予備教育機関としての最大の目的は、留学生を大学学部などの高等教育機関に進学させる事であり、留学生が進学先で困らないよう事前に講義のため及び日本人とのコミュニケーションのための日本語力を養成する機関であることが分かる。

進学予備教育機関としての問題点は、小堀（2002）は「受験のための日本語教育に偏ってしまう恐れが生じる」と、嶋田（2005）は「(EJUが) 試験である以上何らかの対応は必要であるが、日本留学試験で高得点獲得を目指し、傾向と対策的な授業に走ったのでは、真の意味での予備教育を実施しているとは言えない」と苦言している。また、嶋田（2005）は日本語学校でアカデミック・ジャパニーズの養成にどう取り組んでいるかについてのアンケート調査をした結果として「1月～3月の最終の学期を使用して、スピーチ、プレゼンテーションを多くしたり、レポート作成に時間を割くという例も多く見られた。しかし、個々の教師が取り組んでいるにしても、まだ学校全体として検討をしたり、取り組むという態勢にはないという傾向が見られた」と報告している。多くの日本語学校で12月のJLPT後から3月の卒業までは、高等教育機関への橋渡しとしての期間として位置づけられており、教師主導型での受容技能中心の授業ではなく学習者主体のパフォーマンス重視の産出技能中心の授業を推奨していることがうかがえる。しかし、実際には授業デザインが体系的になされているとは言えず、機能しているとは言いがたいのも現状である。また、12月のJLPT後に学生が燃え尽き症候群のようになってしまい、卒業までの授業が消化試合のような内容になってしまう事も大きな問題であると言える。

JLPTやEJUの日本語の試験は筆記試験のみで口頭での試験は行われなかったといった波及効果から、日本語学校などの授業で「話す」といったパフォーマンスを養成するような取り組みが少なくなってしまうのも仕

方がないことであると思われる。しかも、EJUの「記述」が唯一「書く」という産出技能を測るパフォーマンス評価ではあるが、様々な問題点も各方面から指摘されている。多くの日本語学校が中級以降はJLPTやEJUの日本語の試験対策として「聞く」「読む」などの受容重視の授業に偏りすぎ、「話す」「書く」などの産出技能、パフォーマンスの養成ができてこなかった事は大きな問題として挙げられる。

その他の問題として、多くの日本語学校では4技能「話す」「書く」「読む」「聞く」をバランスよく効率的に学習ができるよう授業計画されているが、特に初級の段階では、生活に必要な技能の養成として教室活動の中では「聞く」「話す」活動が占める割合が大きい。中級からは技能別の学習が中心になるが、昨今急増しているベトナムやネパールからの留学生の中には、2年かけて初級終了という場合もある。その場合、生活会話としての「聞く」「話す」は習得できたとしても、学習のための「読む」「書く」の習得はできずに日本語学校を卒業してしまう恐れがある。この問題については、カミンズ（1980）の第二言語習得における生活言語能力と学習言語能力との違いから説明できる。生活場面で必要とされる言語能力を伝達言語能力あるいは生活言語能力（以下、BICS）というのに対し、分析、解釈、類推など教育現場で学力を付けるのに必要な認知処理能力を学習言語能力（以下、CALP）という。BICSは周囲の状況やボディランゲージなどの非言語、あるいは相手からのフィードバックといった文脈の助けがあるため比較的短期間（1～2年）での習得が可能であるが、一方、CALPは説明を聞いたり思考力を使って読み取ったり分析したりなど言語形式への依存度が高いので認知負担が大きく、習得には7～8年を要すると指摘している。日本来日時に初級前半レベルの留学生では、1～2年の日本語学校での勉強だけでは主にBICSしか養成できず、CALPが育たないまま卒業させざるを得ない状況でもあり示唆できる。

学部留学生に対する初年度教育については、日本語

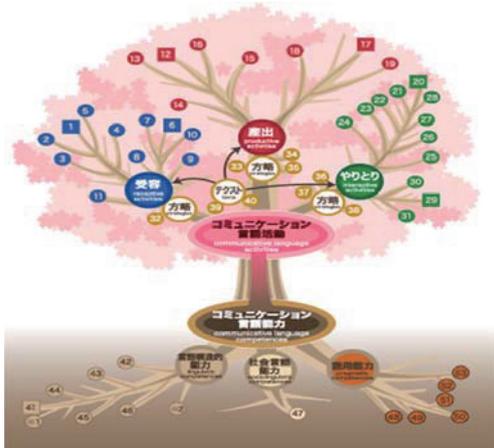
学校では十分に養成できなかったパフォーマンス活動を取り入れること、BICS については問題ないことから、特に、日本人学生同様に初年次教育で行う「話す」技能のスピーチやプレゼンテーションなどといった学習活動を取り入れることが重要であり、その際、パフォーマンスを評価するためのルーブリックの作成が必要となる。そこで、今回、ルーブリックを作成するにあたり、国際交流基金のJF 日本語教育スタンダード2010（以下、JFS）を参考にプレゼンテーションのためのルーブリックを作成した。

### 3 ルーブリックを活用したパフォーマンス評価

#### 3-1 JF 日本語教育スタンダード 2010

「相互理解のための日本語」という理念のもと、国際交流基金において開発されたものが JFS である。日本語を使って何がどのようにできるかという能力に重点を置き、日本語の熟達度を日本語を使って何ができるのかをリスト化した Can-do によって提示しているのが特徴である。『JF 日本語教育スタンダード 2010 利用者ガイドブック』によると、「JFS では、言語によるコミュニケーションを図1「JF スタンダードの木」で示したように整理し、熟達度を6つのレベルに分け、Can-do は言語能力と言語活動の53のカテゴリーに分類され、各レベルで何がどのくらいできるかを言葉で表現している。」と明記されている。

図1 国際交流基金「JF スタンダードの木」



#### 3-2 ルーブリックの作成と手順

国際交流基金の『学習を評価する』を参考に図2のような評価シートを作成するにあたり、図4のようなルーブリックを作成した。

まず、評価シートにおける縦軸となる評価の観点を決めた。目標レベルの産出（話す）の言語活動に必要な言語能力は、今回の評価の観点は、言語活動に関しては、「日本語の表現（流暢さ）」「声の大きさ（発音）」とし、また、学習目標も評価の観点のひとつとして「内容」「構成」「発表態度」とした。

つぎに、評価シートにおける横軸となる評価基準で扱うレベルを決めた。学生の話す力の差は小さいと思われるため、「日本語の表現（流暢さ）」「声の大きさ（発音）」については初年次教育ということもあり JFS の B1 の Can-do（図3参照のこと）と、学習者の現在の熟達度であろう A2 の Can-do（図3参照のこと）を利用して、評価基準を作成した。

評価基準の達成度を4段階に設定し、初年度教育の目標レベルである B1 は、4段階の達成度の「3」に置き、その少し上のレベルを「4」とした。これは B1 レベルのことが達成できて学習は終わりではなく、次の目標が見えるような形にし、学習者の動機づけとなるようにするためである。

それから、JFS の A2 と B1 の Can-do を書き換えて図4のルーブリックを作成し、最後に、図2評価シートを作成した。

図2 評価シート

評価の観点	1頑張って 2もう少し 3できた 4素晴らしい				
評価項目	内容	1	2	3	4
	構成	1	2	3	4
	発表態度	1	2	3	4
	日本語の表現	1	2	3	4
	声の大きさ	1	2	3	4

図3 国際交流基金「Can-do」の6つのレベル（【⑩講演やプレゼンテーションをする】）

C2	話題についての知識のない聴衆に対しても、自信を持ってはっきり複雑な内容を口頭発表できる。聴衆の必要性に合わせて柔軟に話を構造化し、変えていくことができる。
C1	複雑な話題について、明確なきちんとした構造を持ったプレゼンテーションができる。補助事項、理由、関連事例を詳しく説明し、論点を展開し、立証できる。 聴衆からの不意の発言にも対応することができる。ほとんど苦勞せず自然に反応できる。
B2	事前に用意されたプレゼンテーションをはっきりと行うことができる。ある見方に賛成、反対の理由を挙げて、いくつかの選択肢の利点と不利な点を示すことができる。 一連の質問に、ある程度流暢に、自然に対応ができる。話を聞く、あるいは話をする際に聴衆にも自分にも余分な負荷をかけることはない。
B1	自分の専門でよく知っている話題について、事前に用意された簡単なプレゼンテーションができる。 ほとんどの場合、聴衆が難なく話についていける程度に、はっきりとしたプレゼンテーションをすることができ、また要点をそこそこ正確にのべることができる。 質問には対応できるが、そのスピードが速い場合は、もう一度繰り返すことを頼むこともある。
A2	身近な話題について、リハーサルをして、短い基本的なプレゼンテーションができる。 話を終えた後から出される簡単な質問に答えることができる。
A1	非常に短い、準備して練習した言葉を読み上げることができる。例えば、話し手の紹介や乾杯の発声など。

図4 ルーブリック

評価の観点	1 がんばって	2 もう少し	3 できた	4 すばらしい
内容	授業という面でも情報という面でも問題がある	授業という面では問題はないが、情報に問題ある	授業という面では問題なく、最低限の情報はある	授業という面でも問題なく、情報量も適切である
構成	写真など使われていなく視覚的にも良くない	写真など使われているが視覚的には良くない	写真など使われ、視覚的にも問題ない	写真など適切に使われ、視覚的にも問題ない
発表態度	丁寧な言葉遣いと態度で、発表を行うことができない	思い出すのに少し時間がかかり、不自然さはあるが丁寧な言葉遣いと態度で、発表を行うことができる	丁寧な言葉遣いと態度で、発表を行うことができる	自然に、丁寧な言葉遣いと態度で発表を行うことができる

日本語の表現 (流暢さ)	言葉に詰まったり、言い直すことがかなり多いが、なじみのある話題であれば、ある程度言いたいことを表現でき、短いやり取りを行うことができる	間があいたり、言い直したり、言い換えたりすることが多いが、短い話であれば、言いたいことを相手に理解させることができる	文法や語彙を正確に使おうとして間があいたり言い直したりすることはあるが、あまり困難なく、ある程度の長さのわかりやすい話しをすることができる	言いたいことを比較的困難なく表現できる。間があいたり行き詰まったりすることはあるが、人の助けを借りずに話を続けられる
声の大きさ (発音)	聞き取りにくいところが多く、言っていることを理解するのが難しい	聞き取りにくいところがまだあるが、相手がよく聞けばだいたい理解できる	聞き取りにくいところはほとんどなく、理解できる	聞き取りにくいところはなく、よく理解できる

#### 4 今後の課題

今後の課題としては、まず、実際にルーブリックを使用して学生の反応を調べる必要があることである。プレゼンテーションなどの産出型教室活動はクラスの雰囲気が大変であり、学生間のインターアクションやピア・ラーニングの概念がないクラスでは機能しないと思われる。そのようなクラスでは産出型教室活動を実施する前にできるだけクラス内の環境をよくしておく必要があるだろう。

次に、今回は産出型のパフォーマンスでプレゼンテーションを考察したが、他のスピーチやレポートなどといったパフォーマンスによる評価も検討する必要がある。また、学生が授業で「話す」ことに自信を持つことで他の「書く」「読む」「聞く」といった技能に良い影響を与えるか因果関係についても考察するべきである。

最後に、今後の課題としてはまだまだ数多くあるが紙面の関係上割愛することとする。今後は実際に試案したルーブリックを活用した授業を行い、留学生の初年次教育に適した教室活動のあるべき姿を模索していきたい。

#### 【引用・参考文献】

- 1)梅田康子；日本語予備教育における内容重視型日本語教育の試み, 言語と文化, 15 : 59-78, 2005
- 2)Cummins, J ; The Entry and Exit Fallacy in Bilingual Education NABE Journal, 4 : 25-60,1980
- 3)国際交流基金；学習を評価する（国際交流基金日本語教授法シリーズ第12巻）, ひつじ書房, 2011
- 4)国際交流基金；日本語能力試験公式問題集N2, 凡人社, 2012
- 5)国際交流基金；JF 日本語教育スタンダード 2010 利用者ガイドブック,  
[https://jfstandard.jp/pdf/jfs2010ug\\_all.pdf](https://jfstandard.jp/pdf/jfs2010ug_all.pdf) (2015,11,20)
- 6)国際交流基金 日本語事業運営部；JF 日本語教育スタンダードに基づいたパフォーマンス評価と日本語能力試験の合否判定との関係—国際交流基金研修参加者を対象とした試行調査—,  
[http://jfstandard.jp/information/attachements/000125/jfs\\_jlpt\\_report.pdf](http://jfstandard.jp/information/attachements/000125/jfs_jlpt_report.pdf) (2015,11,20)
- 7)小堀郁夫；外国人留学生と日本語教育—私費留学生の場合—, 明海日本語, 7 : 1-10,2002
- 8)嶋田和子；予備教育におけるアカデミック・ジャ

- パニーズに関する一考察, 日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ (2) 日本語留学試験が日本語教育に及ぼす影響に関する調査・研究—国内外の大学入学前日本語予備教育と大学日本語教育の連携のもとに—, 平成 14 年～16 年度 科学研究費補助金基盤研究費 (A) (1) 研究成果報告書:79-92, 2005
- 9) 嶋田和子 ; 非漢字圏学習者に対する日本語指導法—「学ぶこと・教えること」の根本的な見直し—, ウェブマガジン留学交流, 45:1-16, 2014
- 10) 独立行政法人日本学生支援機構 ; 日本留学試験「日本語シラバス」,  
[http://www.jasso.go.jp/eju/syllabus\\_01.html](http://www.jasso.go.jp/eju/syllabus_01.html) (2015, 11, 20)
- 11) 中嶋一恵他 ; ルーブリックを使用した学外実習評価基準の作成について, 長崎女子短期大学紀要, 38 : 102-107, 2014